



**Data**

監督: アリ・アッバシ  
原作: ヨン・アイヴィデ・リンドク  
ヴィスト『ボーダー 二つの世界』(ハヤカワ文庫NW)  
脚本: アリ・アッバシ/ヨン・アイ  
ヴィデ・リンドクヴィスト/  
イラベラ・エクルーフ  
出演: エヴァ・メランデル/エー  
ロ・ミロノフ

### ■■■ショートコメント■■■

◆第71回カンヌ国際映画祭で「ある視点賞」を受賞した他、スウェーデン・アカデミー賞で最多6部門を受賞した本作については、批評家の評価は高い。公式ホームページよれば、本作のストーリーは次の通りだ。

孤独な税関職員のティーナは、ある日、謎の男に出会う――。  
スウェーデンの税関に勤めるティーナは、違法な物を持ち込む人間を嗅ぎ分ける能力を持っていたが、生まれつきの醜い容姿に悩まされ、孤独な人生を送っていた。

ある日、彼女は勤務中に怪しい旅行者ヴォーレと出会うが、特に証拠が出ず入国審査をパスする。ヴォーレを見て本能的に何かを感じたティーナは、後日、彼を自宅に招き、離れを宿泊先として提供する。次第にヴォーレに惹かれていくティーナ。しかし、彼にはティーナの出生にも関わる大きな秘密があった――。

◆本作は第91回アカデミー賞でメイクアップ&ヘアスタイリング賞にノミネートされているが、その理由は本作のヒロイン(?)として登場するティーナ(エヴァ・メランデル)の容姿をみればすぐわかる。つまり、税関職員の制服姿で任務に立つティーナの容姿をみれば、それだけでその異様さ(ハッキリいって醜さ)を感じてしまうはずだ。また、ある日怪しげな旅行者ヴォーレ(エーロ・ミロノフ)の姿を見ると、互いの容姿だけでこの2人の共通点を感じ取ってしまう。

スウェーデンの作家、ヨン・アイヴィデ・リンドクヴィストの原作によると、この2人は“トロール”とよばれる、人間とは異なる一族(種)らしい。なるほど、なるほど……。ティーナの違法な物を持ち込む人間を嗅ぎ分ける能力が人間離れているのはそのせいだが、ティーナはなぜ人間社会に違和感を持ちつつ、“半分”溶け込んでいるの？

◆森の中に夫と二人で住み、時々“散歩”に出て狐や鹿と戯れている(?) ティーナの姿を見ると、スウェーデンの田舎には今なおこんな風景があるのかと感心させられる。しかし、家の離れにヴォーレを同居させたことによって、次第にヴォーレの実態を知らされ、自分もトロールの女としての喜び(?)を知っていくと・・・。

本作も原作もその“狙い”はよくわかるのだが、いかんせん恐がりの私は、ティーナの醜い容姿を見ていると、どうしても彼女の“善なる部分”に同調・同化できなくなってしまふ。ましてや、本作中盤のクライマックスとなる、トロールであることを認識したティーナがヴォーレと素っ裸になって睦み合うシークエンスをみると、そこに美しさや喜びを感じることはできず、嫌悪感の方が先に・・・。ヴォーレがいうように、人間の方が醜く、トロールの方が美しいのだろうが、私にはなかなかそのメッセージが伝わってこないのが少し残念だ。

◆もっとも、本作ラストにかけては、トロールであるヴォーレが人間に対して仕掛けている復讐の残酷さが如実になってくるので、私のトロールに対する反発心も少しは正当性が・・・?そして、それはトロールであるティーナも同じだったようで、人間社会に少しなじみのあるティーナは、ティーナに対してトロールの種の保存を求めるヴォーレを拒否。そればかりか、ヴォーレの人間に対する復讐も拒否することになるので、それに注目したい。

◆ロバート・デ・ニーロとアル・パチーノが共演した映画『ボーダー』(07年)の原題は『Righteous Kill (ライチャス・キル)』(『シネマ24』84頁)。その邦題の『ボーダー』はもちろん境界の意味で、原作では、道理ある殺人とそうでない殺人との「ボーダー」という意味で使われていたが、イマイチ意味不明の邦題だった。

それに対して、本作は英題も『Border』で、邦題も『ボーダー』だが、邦題には「二つの世界」というサブタイトルがついている。これは本作が人間とトロールという二つの世界の「ボーダー」を描いたためだ。したがって本作では、ヒロイン(?) ティーナと、そのお相手のヴォーレの2人が、体を張って見せる二つの世界のボーダーを、しっかり味わいたい。もっとも、その後味がいいかどうかは保証の限りではないが・・・。

2019 (令和元) 年10月25日記